４　次の文章はそれぞれ**Ａ**『文照聞書』、**Ｂ**『古今集』仮名序、**Ｃ**『古今集』真名序の一節である（設問の都合で一部省略した）。読んで設問に答えよ。

〈北海道大〉二〇二一年度出題

**Ａ**　イ筆者、和歌に枕詞と言ふ事有り。足引・久方・千早ぶるこの外あまた有るよし承る。歌の始めの五もじにのみあらば枕詞といふもにへ候はんが中の五もじにも有る事有り。たとへば「久方の光のどけき」あるはよし。「の原こぎでて見れば久方の」とも有り。老君答へて甚だて尤成る不審。この事予が十才の時分より不審に思ひて和学者といふ和学者問ひしかど、誠にしらぬか但しをしんでいはぬかそのロ正義をあかす人のなかりし也。十四の年に季吟翁に拝面してこの事を第一に尋ねしかば季吟曰、これは秘説ありて甚深の事あり。『古今集』の両序を熟読すれば考へらるる事也。今訳ををしむにはあらねどまづ以て其両序を考へたまへ。いよいよしれずば重ねて教へ申さんと言ふ。其後日夜かな序まな序に眼をさらして寝食も忘るる工夫をこらせし也。三年目と言ふに思ひ寄りたる事有りて大方この事よと思ひけれど自ら了簡に定めがたさに、季吟翁に予が思ひを問はんと思へど、この人のへ幸便も思はしからずしてけふよあすよと思ふ内に、この人伊勢参宮せられしに、で宿までにて行きてハ予が思ひ付の説を文に書きて見せたりしに大きに褒美して、これ正義也、我家に伝ふる秘説に毛頭相違なし、驚き入りたる秀才也。今この不審を立てたる事甚だしき手柄なり。これ全く汝が心にあらじ。この説のむなしく世に伝はらざらん事を和歌三神もをしませ給ひて、汝をして問はしめてこの説を世に残さんとする神の御心なるべし。いでやそれを天子の御製有るおりに、其御製の始めの五もじをめぐらされても思はしくなき時に、心得たる臣下を御前に召されてみことのりしたまはく、朕今歌一首を作るに其歌成就していまだ初句を得ず、汝らこの初句を補ひてよとふ時に、臣下たち慎んで工夫をこらし思ひ思ひに五文字を書きて奏聞し奉る中に、叡慮にひたるを取りて用ゐさせたまふ也。第三の句の時も同じ儀式也。さて其五文字を臣下より奉るからに枕詞と言ふ。臣等の二字をまくらとよむ事、古今集の両序を見て知るべし。其詞を例として天子の御歌ならでも枕詞と言ふ物に成りたる也。山とよみたまふ上の所に五文字たらぬ故に品々に臣下立ち寄り奏聞せし中に、足引といふが御心に叶ひたればこの足引が末代まで山の枕詞に定りたる物也。この外数千万の枕詞も道理は皆其通りの事也。さて後にの考へもなく歌の道もうとき人の何の了簡もなく枕詞と書きしより、正義はうせ行きて世にこの事知る人もなき様に成りし也。ニひすべしひすべし。

**Ｂ**　それ、まくらことば、春の花ひ、少なくして、しき名のみ、秋の夜の、長きをてれば、ホかつは、人の耳にり、かつは、歌の心に恥ぢ思へど、

**Ｃ**　臣等、詞少春花之艶、名竊秋夜之長。況哉、進恐時俗之嘲、退慙才芸之拙。

（、は春の花の少なく、名は秋の夜の長きをめり。や進みては時俗のを恐り、退きては才芸のきをづるを。）

注　『文照聞書』――著者不明。序文に横井也有（一七〇二～一七八三）の話を書き付けたものとするが、偽書とされる。

『古今集』仮名序・真名序――古今集には仮名で書かれた序文（仮名序）と漢字で書かれた序文（真名序）の二つがある。**Ｂ**と**Ｃ**の文章は**Ａ**で触れられた部分を取り上げた。

季吟翁――北村季吟（一六二四～一七〇五）。江戸前期の和学者・俳人・歌人。

和歌三神――和歌の守護神とされる三柱をあげたもの。一般的に住吉明神・玉津島明神・柿本人麻呂をいうが諸説ある。

問１　傍線部ロ・ホを現代語に改めよ。

問２　二重傍線部イ「筆者問曰」とあるが、具体的に筆者はどのようなことを質問したのか。六〇字以内で説明せよ。

◎問３　二重傍線部ハ「予が思ひ付の説」とあるが、どのような説が書かれていたのであろうか。六〇字以内で答えよ。

問４　二重傍線部ニ「ひすべしひすべし」とあるが、何をどのようにせよというのか説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ロ＝Ａ正しい意味をＢ明らかにする人がＣいなかった

Ａ＝４〔「正しい解釈」なども可。〕

Ｂ＝４〔「説明する」「解き明かす」なども可。〕

Ｃ＝２〔過去「き」の誤訳は０。〕

　　　ホ＝一方では

問２　Ａ枕詞が和歌の初句にある場合にそれを枕詞と言うのは納得できるが、  
Ｂ第三句にある場合でもそれを枕詞と言うのはなぜかということ。（60字）

Ａ＝３〔「枕詞が初句にあるのは納得できる」という内容も可。「初句」を「始めの五もじ」のままとするものは減点２。〕

Ｂ＝７〔「枕詞が第三句にもあることがあるのはなぜか」という内容も可。「第三句」を「中の五もじ」のままとするものは減点２。〕

問３　Ａ『古今集』の仮名序と真名序を根拠に Ｂ「臣等」を「まくら」と読むとし、Ｃ「枕詞」の本義が「臣下が帝に献じた詞」だとする説。（58字）

Ａ＝２〔「真名序と仮名序」は「両序」でもよい。〕

Ｂ＝３〔「『まくら』と『臣等』が対応している」などでもよい。〕

Ｃ＝５〔枕詞は本来、帝が臣下に献上させたものであるという旨があればよい。〕

［別解］「枕詞」は「臣下が帝に献じた詞」の意だとし、その根拠を『古今集』仮名序の「まくら」と真名序の「臣等」の対応に求める説。（59字）

問４　Ａ枕詞の由来に関する説をＢ秘密にせよと言っている。

Ａ・Ｂの両方が必須。Ａは「枕詞についての秘説」などでもよい。Ｂは「むやみに人に伝えてはならない」などでもよい。命令「べし」を「べきだ」とするものは減点２。

【現代語訳】

**Ａ**　筆者が質問して言うことには、「和歌に枕詞と言う事がある。足引・久方・千早ぶる、この他にもたくさんある旨をうかがっている。歌の初めの五文字（＝初句）にだけあるのであれば枕詞と言うのもそのとおりだと聞こえましょうが中の五文字（＝第三句）にもあることがある。たとえば『久方の光のどけき』（＝初句に枕詞がある例）とあるのはよい。（しかし）『和田の原こぎ出でて見れば久方の』（＝第三句に枕詞がある例）ともある。（このようなものを枕詞というのはどうしてなのか。）」（と筆者が言った。）老君が答えて（言うことには、）「たいそうもっともな疑問である。このことは私が十歳の時から疑問に思って和学者（＝日本の文学などの学問に通じた人）という和学者に尋ねたが、本当に知らないのかただ惜しんで言わないのか（、どちらかはわからないが、なんにせよ）その問１ロ正しい意味を明らかにする人がいなかったのだ。十四歳の年に季吟翁に会い申し上げてこのことをまず第一に尋ねたところ季吟が言うことには、『これは秘説があって非常に奥深いことがあるのだ。『古今集』の両序（＝仮名序と真名序）を熟読すれば自然とわかることである。いまその理屈（を教えること）を惜しむのではないがまずはとにかくその両序を（ひき比べて）考えなされ。とうとうわからなかったらもう一度（教える機会を持って）教え申し上げよう』と言う。その後、日夜仮名序と真名序をくまなく見て寝食も忘れるほどあれこれと考えを巡らせたのだ。三年目というときになってはっと考えついたことがあっておそらくこのことよと思ったが自分で考えたことゆえ（、正しいのかどうか）判定しがたいために、季吟翁に私の思い付き（の説の正否）を尋ねようと思ったが、この人のもとに会いに行くよい機会も思わしいようにはなくて今日よ明日よと思っているうちに（機会が延び延びになっていたが、そんな折）、この人（＝季吟）が伊勢神宮に参詣なさったときに、（私は）こっそりと神戸宿まで早舟で行って私の思い付きの説を手紙に書いて見せたところ（季吟が）たいそう褒めて（言うことには）、『これは正しい解釈である、我が家に伝わる秘説に少しも相違ない、驚きいってしまう才能の持ち主である。いまあなたがこの疑問を持ったことがたいそうな手柄である。これは全くあなたの心（から独りでに出た疑問）ではあるまい。この説が甲斐なくも世の中に伝わらないようなことを和歌三神も惜しみなさって、あなたに疑問を持たせることでこの説をこの世に残そうとする神の御心にちがいない。』（と季吟は言った。）さあ、（本題の）そのことだよ。帝の御製（＝帝が和歌を詠むこと、またその和歌）があるときに、その御製の初めの五文字が叡慮（＝帝のお考え）をめぐらしなさっても思わしくないときに、（和歌に）心得がある臣下を御前にお呼びになって詔をしなさることには、『私はいま歌一首を作るに際してその歌が出来上がったがまだ初句を思いつかない、お前たちよ、この初句を補え』とおっしゃるときに、臣下たちが謹んであれこれと思いを巡らし、思い思いに（初句にふさわしい）五文字を書いて奏上し申し上げる中で、叡慮に適っているものを採用しなさるのだ。第三句の時も同じ作法である。そこでその五文字を臣下から献上するので枕詞と言う。臣等の二字をまくらと読むことは、古今集の両序を見て知ることができる。それらの言葉などを先例として帝の御歌でなくても枕詞と言うものになったのである。山と（帝が）詠みなさる上のところに五文字足りないためにそれぞれの身分に応じて臣下が立ち寄って奏上した中に、足引というの（＝句）が（帝の）御心に適いなさったのでこの足引が遠い先の世でも山の枕詞として定まったものである。この他数千万の枕詞も理屈はみなこのとおりのことである。さて後（の世）にこのような考えもなく歌の道にも疎い人が何の思慮もなく枕詞と書いて以来、正しい意味は消え失せて世にこのことを知る人もないようになったのである。（この説は）秘密にせよ、秘密にせよ。」（と老君が言った。）

**Ｂ**　さて、私たちの言葉は、春の花のような美しさが少なく、空虚な名声ばかりが、秋の夜のように、長いことと結び付けられ（さも立派であるかのように噂され）、問１ホ一方では、人々の評判を恐れ、一方では、歌の本質に（照らして、わが身を）恥ずかしく思うが、

**Ｃ**　臣下たち（＝我ら選者たち）は、言葉は春の花のような美しさが少なく、（それにも関わらず）名誉ばかりは秋の夜のように長いことを密かに我がものとした。いうまでもなく（人前に）進み出ては世間の人々の嘲りを恐れ、退いては（自分の）才能や技術が未熟であることを恥じている。